

博士論文(要約)

スクールカウンセラーのどのような協働のあり方が
担任教師の役に立つか

—小中学校の担任教師の語りに基づく検討—

山本 渉

第1部 問題と目的

第1部では、先行研究の概観を行い、本論文全体の目的を設定した。

第1章では、本論文の問題意識を提示した。まず、日本のSCの導入と発展の経緯、および、日本のSCの特徴を整理した。その上で、SCとともに働く教育の専門家であるとともにサポートを受ける重要な利用者の一人として担任教師がいることを述べ、SCのどのような協働のあり方が彼らの役に立つかを検討していくことが、今後SC活動をさらに洗練・発展させていく上で重要であることを指摘した。また、これまで中学校で進められてきたSCの全校配置が小学校にも拡充されつつある現状を指摘した。その上で、小学校と中学校の違いを3つの観点から整理し、小学校の担任教師にとって役に立つ協働のあり方を、中学校との共通点や相違点を踏まえながら検討していく必要性を提示した。

第2章では、先行研究の概観を行った。まず、担任教師の視点を検討した研究を概観したところ、先行研究の多くが質問紙調査であり、どのようなプロセスを経て何を得ているのか、どこにニーズがあるのかといった詳細な情報が得られていないこと、インタビュー調査や担任教師自身の手による事例研究は数が少ない上、一事例または少数事例を検討したものであるため、統合的なモデル提示に至っていないことが課題として挙げられた。次に、小学校におけるSCの活動や協働のあり方の特徴についての先行研究を概観した。その結果、小学校におけるSCの活動や協働のあり方の特徴に関する知見の蓄積自体がまだ十分でないこと、小学校におけるSCの活動や協働のあり方の特徴に関して担任教師の視点を踏まえた知見が少ないこと、中学校との違いと共通点について十分に明らかにされていないことが課題として挙げられた。

第3章では、以上の内容を踏まえ、SCのどのような協働のあり方が担任教師の役に立つのかについて、複数の担任教師に共通する体験を質的に明らかにすること、そしてそれを小学校と中学校の共通点や相違点を踏まえながら検討していくことを論文全体の目的とし、本論文の構成を示した。

第2部 中学校の担任教師はスクールカウンセラーにどんな期待をして協働に臨み、何を得ているのか

第2部では、中学校の担任教師がSCにどんな期待をして協働に臨み、何を得ているのか、担任教師の視点から把握することを目的に、2つのインタビュー調査を行った。

第4章(研究1)では、中学校の担任教師にSCとの協働の開始を促す状況と協働の成立を支えている担任教師の動機を明らかにするため、中学校の担任教師16名にインタビューを行った。その結果、生徒の気になった言動の背景や理由を推測すること、そして、生徒の抱える問題への対応を考える際に、担任という立場に身を置くことで生じる制約を感じることが、担任教師にSCとの協働の開始を促していることが示唆された。また、中学校の

担任教師が SC に期待する協働の内容は、「子ども・保護者に一緒に対応する人になること」、「自分に対応するにあたっての相談者になること」、「自分の対応に役立つ情報の提供者になること」という 3 種に整理できることが示唆された。

第 5 章（研究 2）では、研究 1 と同じ対象者のインタビュー・データを用いて、中学校の担任教師は生徒・保護者への対応において SC の活動をどのように生かし、どのような体験をしているのか、その体験プロセスを担任教師の視点から検討した。その結果、中学校の担任教師が SC の活動をどのように生かしているのかは、「担任のしづらい動きを担ってもらうことでゆとりを得る」、「SC の情報や発言から生徒・保護者への理解を深める」、「対応にあたってのガイドを得て判断の参考にする」、「気持ちや考えへの保証を得て精神面の回復に役立てる」の 4 つに整理されることが示唆された。そして、これらのいずれか、あるいは複数の生かし方をした結果、担任教師はそれまでよりも生徒・保護者に「安定して対応できる」ようになると考えられ、さらに、SC との協働を経て「安定して対応できる」ようになることがきっかけとなり、担任教師自身の「対応スタンスの変化が促される」場合もあることが示唆された。

第 3 部 小学校におけるスクールカウンセリング活動の特徴に関する検討 **—中学校との比較から—**

第 3 部では、第 4 部で小学校の担任教師へのインタビュー調査を行う前段階として、小学校における SC 活動の特徴が第 1 部のレビューに挙げた限りかどうかを検討することを目的とした。

第 6 章（研究 3）では、小学校における SC 活動の特徴や中学校との違いについて、小中両方に勤務経験のある SC6 名へのインタビューを通して検討した。その結果、第 2 章の先行研究のレビューでは窺えなかった点として、小学校では、学級の子もたちとの間に形成される緊密な関係を基盤に、担任教師が親のような心持ちで子どもたちに関わっている可能性を見出した。SC と協働を行う際にも、こうした特徴が何らかの影響を及ぼしてくる可能性があると考えられた。

第 4 部 小学校の担任教師はスクールカウンセラーにどんな期待をして協働に臨み、 何を得ているのか

第 4 部では、小学校の担任教師を対象とした 2 つのインタビュー調査を行い、第 2 部で見出された中学校教師の体験との比較も行いながら、小学校の担任教師が SC にどんな期待をして協働に臨み、何を得ているのか、それは中学校の担任教師とどのような点で異なるのかを検討した。

第 7 章（研究 4）では、小学校の担任教師 6 名にインタビューを行い、SC との協働の開

始を促す状況と協働の成立を支えている担任教師の動機について検討した。その結果、小学校においても、中学校と同様、子どもの気になった言動の背景や理由を推測すること、そして、子どもの抱える問題への対応を考える際に、担任という立場に身を置くことで生じる制約を感じる事が、担任教師に SC との協働の開始を促していることが示唆された。一方、小学校に特徴的な点として、学級担任制ならではの構造から、担任教師が子どもの気になった言動の原因について自責的に考えやすい場合があること、担任教師が気づかない子どもの状態や様子を教えてほしいというニーズがあること、担任教師が教室でできる具体的な支援を教えてほしいというニーズがあることが見出された。

続いて、第 8 章（研究 5）では、研究 4 と同じ対象者のインタビュー・データを用い、小学校の担任教師が子ども・保護者への対応において SC の活動をどのように生かし、どのような体験をしているのか、その体験プロセスを担任教師の視点から検討した。その結果、小学校の担任教師が SC の活動をどのように生かしているのかは、中学校の担任教師と同様、《担任のしづらい動きを担ってもらうことでゆとりを得る》、《SC の情報や発言から子ども・保護者への理解を深める》、《対応にあたってのガイドを得て判断の参考にする》、《気持ちや考えへの保証を得て精神面の回復に役立てる》の 4 種に整理されることが示唆された。一方、小学校の担任教師に特徴的な体験として【自責的な見方を手放す】という体験が見出され、これは、担任教師が SC の情報や発言をきっかけに子どもの問題を自分と子どもの二者関係以外の文脈から捉え直せるようになり、【子ども・保護者の姿がより良く見えるようになる】ことに伴って起こる現象であることが確認された。

第 5 部 総括

第 5 部では、本研究の成果と今後の課題を整理した。

第 9 章では、得られた知見を改めてまとめた上で、臨床的示唆として、小中に共通する示唆を 5 点、小学校に特化した示唆を 2 点提示した。これらを先行研究の知見と比較しながら説明し、それぞれの示唆から考えられる SC の動き方や協働のポイントについても論じた。さらに、理論的示唆として、(1)SC との協働を求める担任教師は、従来のモデルでいうところのコンサルテーションや情報提供へのニーズのみを持つのではなく、教師自身へのカウンセリング的関わりへのニーズも同時に持ちうること、(2)臨床心理学を基盤とする SC が担任教師と協働することで教師側にもたらされる変化には、担任教師と SC の対話を通した、日々の実践の中でのもやもやとした感覚の言語化、より広い視野のもとでの価値観の変化、行き詰った中での新たな価値観の獲得といった新たな価値が内包されていることの 2 点を指摘した。

本論文の意義としては、(1)担任教師という利用者の視点から SC との協働の質的な体験内容を可視化・体系化した意義、(2)担任教師との協働のあり方に関する小中の共通点と相違点を整理した意義、(3)SC による学校臨床活動の成果を質的に検証した効果研究としての

意義, (4)SC の協働に含まれる支援的な意味を明らかにした意義, (5)臨床心理士が学校という社会的場面で果たしうる意味を見出した意義の 5 点が挙げられた。

今後の課題としては, (1)中学校の知見の一般化可能性の検討, (2)SC による家庭訪問についての検討, (3)小学校の特徴に関する知見の精緻化, (4)担任教師が SC の活動を上手く生かせなかった事例の収集と検討, (5)担任教師のニーズに応えることを巡る諸課題についての検討の 5 点が挙げられた。

以上